

〈祈りのために〉

わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。

ヨハネによる福音書 10章 27節

現在、天皇の代替わりの問題が議論されていますが、女性は天皇になれないとされています。そこには、この国の男尊女卑的なあり方がはっきり示されています。また、元号の問題も議論されていますが、元号は、その国が誰の支配と庇護の下にあるのかを表すものですから、天皇を中心として元号が決められている国に生きる者は、天皇の支配と庇護の下にあるということを意味しています。そこから、天皇を崇め、敬い、従うのは当然だという考えが導き出されると共に、違う認識を持つ者たちは非国民だと見做すようなことが起こるのです。また、この国は天皇を中心とした一つの民族であると思いたい人たちは、「日本人以外は排斥せよ」と言っています。そのように、天皇制には、男尊女卑や排外主義を生み出す要素が含まれており、そこから、日本人のあるべき姿が勝手にイメージされていくのです。

昨今、そのような考えに基づく人たちの声が、社会に影響を与えるようになってきています。彼らは、様々なところで声を上げ、電話をかけ、インターネットに書き込みをし、社会に圧力をかけています。しかも、彼らの声は、弱い立場にある人や苦しむ人たちにも向けられています。沖縄でも、福島でも、苦しむ人たちが声を上げれば、その思いを圧殺しようとする声がどこからともなく聞こえてくると聞きます。「日本人なら文句を言わず、周りに合わせろ」というような、暴力的で、愛のない声が、苦しみ、悩む人の心を押し潰していくのです。

そのような国に生きるキリスト者として、私たちは何をすべきなのでしょう？ 私たちは、キリストに救われ、キリストの支配と庇護を受けている者です。それゆえ、キリストの声に聞き従い、愛に基き、他者を受け入れ、共に歩む者たちでありたいと思います。苦しみ悩む者の声が圧殺され、無視される状況が無くなることを願い、苦しみ悩む人たちに寄り添う者たちでありたいと思います。何より、イエス・キリストによる救いを宣べ伝え、この社会にキリストの愛が広がっていくことを願い求める者たちでありたいと思います。

〈祈り〉 イエス・キリスト、私たちの主よ。私たちは、あなたの支配と庇護の下にあることを喜び、感謝する者たちです。しかし、この世では、人々の心を押し潰すような声がある力をもっています。どうか、私たちに、知恵と勇気と力をお与えくださり、この社会の中にあなただけの愛が広がり、少しでも良い世界となるための働きをなさしてください。私たちの救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

南 望（香里園教会牧師 靖国神社問題特別委員会委員）

＜ヤスクニ問題とわたし＞

古田和彦（横浜海岸教会長老）

36年ほど前、私は15年弱勤めた一般事業会社を退職して、あるNGO団体に途中入職しました。そこはキリスト教を基盤とする団体ですが、キリスト教主義の学校や施設などと同様、クリスチャンは多くはなく、私がクリスチャンであることから友人の誘いがあったて入職しました。日常的な活動で、キリスト教を意識させることはそんなに多くはなかったのですが、翌年の2月11日、暦では休み（「建国記念の日」）でしたが、休まないで研修を行うとのことでした。理由は、「建国記念の日」を祝日と我々は認めていないので、会員・職員、みんなで学びあう日としているとのことでした。

それ以来、2月11日（場合によってはその振替日）は、信教の自由だけでなく、人権・平和・原子力発電・環境・いじめ・セクシャルマイノリティー問題など、折々のテーマに沿って学びあってきました。今年は、「平和について考える」とのテーマで、昨年8月に広島を訪ねた高校生から戦争のむなしさ、被爆者の悲惨さを語り伝えていく決意を聞き、また、90歳を超えたA氏から、軍国主義の青年時代に何の疑いもなく戦争協力に身をささげることになってしまった反省と、その原因の教育について聞きました。A氏は、本当の学びとは、知識を得ることではなく、多くの情報の中から正しいものと誤っているものを見分ける力、つまり、自分で判断できる知性を身につけることであると語られました。

私は、ヤスクニ問題は天皇制の問題であると認識しています。「建国記念の日」と定められた2月11日は、かつての祝祭日のひとつ、紀元節でした。紀元節は神武建国神話に由来し、明治政府が天皇制国家の「建国記念日」として1873年に定め、その後の学校教育の主要式典となり、子どもたちに天皇中心主義を植え付け、忠君愛国と民族的優越感を抱かせるもので、韓国、中国、アジア・オセアニア諸国へと侵略をしていく思想的根拠となる日でした。敗戦後、天皇の人間宣言により紀元節はその根拠を失い祝日とは認められなくなりました。それにもかかわらず、紀元節復活の動きが1951年ごろから生まれ、紆余曲折の末1966年に「建国記念の日」として祝日法に定める祝日になりました。「建国記念日」でなく、「建国記念の日」となっているのは、その日が歴史的根拠のない日だからです。キリスト者の多くは、この日が上記のような過去の過ちのもととなった日であり、歴史的にも根拠のない日であることと、見張りの務めを果たすことができなかつた悔悟と反省から、「建国記念の日」と呼ぶことに反対し、「信教の自由を守る日」として、日本国憲法に定められている人権、特に、信教の自由が侵されないように学び、考える日として用いてきました。私は、今後もそのように学び、考える日としてこの日を用いていきたいと願っています。

さて、来年、2019年には天皇の代替わりが行われようとしています。天皇は人間宣言をしています。天皇の代替わりにおいて、国事行為として諸行事が行われますが、神道における神となる儀式は行わず、人間天皇にふさわしい代替わりの諸式となるよう、注視し、また、注意を喚起していきたいと思っています。

「沖縄 ～隣人の住む島～ の現状を見て、感じたこと」

照井 勝（滝川教会長老）

2月27日から2日間にわたり開催された「メンソーレ、沖縄に来てみませんか」に参加し、沖縄の歴史と生活、また基地に関する状況を知り、様々なことを考えさせられました。

沖縄戦で住民の集団自決が行われたチビチリガマと激戦地となり兵士以外にも多くの住民に犠牲者が出た宜野湾市の嘉数高台公園などでは、当時の皇民化教育、軍国主義教育により結果的に弱い者が捨て石のように扱われたことを見ました。また、市街地と隣接する巨大な米軍基地では、戦闘機が爆音を発して離着陸を繰り返しており、これらの訓練が行われている背景には、平和のためには日米安保（武力）が必要との声があります。そして、その声に反対せず、黙認してきた自分にもその責任があるはずです。沖縄では日々、頭上を戦闘機が飛び交い、事故や米軍関係者などによる犯罪に巻き込まれる危険と隣合わせです。もし戦争が起きれば、基地は真っ先に攻撃の対象となります。嘉手納基地を見渡せる場所にできた道の駅は、戦闘機を撮影する愛好者や観光客で賑わっていました。その様子から、基地を巡り複雑な思いで暮らす人々の暮らしの一端に触れることができました。

また、私たちは辺野古の新基地建設現場を訪れ、そこで行われていることも目にしました。新基地建設反対派の人々が建てたテント内には多くの展示物があり、この海にはジュゴンやサンゴ以外にも希少な動植物が多数生息していること、そして計画中の新基地がどれほど巨大な施設であり、平和を脅かすものであるのかを知りました。新基地建設阻止への連帯を呼び掛け、資材搬入ゲート前での抗議の座り込みは5063日にも達していました。この日も沖縄各地や他県からも思いを一つにする人々が集まっており、私もゲート前での座り込みに参加して共に抗議の声を上げました。警察機動隊による警告の後、排除が始まると現場の緊張は一気に高まり、騒然となりました。排除に備えて私の腕を取り、固く組んでくれた隣の人のその力と思いに励まされ声を上げて抵抗をしましたが、組んだ腕は外され、ゲート前から連れ出されてしまいました。こうして全員が排除されると、道路に並んでいた大型ダンプが次々と資材を搬入していきました。機動隊員と向き合い、抗議の声を上げても排除され、工事が進められていく現場での体験はとても辛いものでした。しかし、ここに集まった人々はあきらめてはいません。歌や踊りを通して緊張をほぐし、地域やそれぞれの違いを超えて「基地のない平和な社会」を共に夢見て励まし合い、困難と向き合っていました。

イエスさまは「平和を実現する人々は幸いです」と言われました。けれども、人間が考える「平和」には、「基地による平和」もあれば「基地のない平和」もあり、「平和」を巡って対立し合う現実があります。私たちは教会だけでなく社会においても、主イエスの歩まれた道を覚えつつ平和が実現するために、多くの真剣な議論と祈り、そして行動を必要としているように思いました。沖縄での経験は、帰宅して日常の生活に戻った今も脳裏に焼き付いています。イエスさまの言われる平和を実現するために、このツアーを計画し、働き、ご奉仕くださったすべての方々に心より感謝いたします。

<ヤスクニ関連ニュース>

- 自衛官の安保出動不服従確認裁判、審理差し戻し（東京高裁、1月31日）

安保保障関連法に基づく防衛出動は憲法9条違反であるとして、陸上自衛隊の男性（茨城県）が国を相手に、「存立危機事態」での命令に従う義務がないことの確認を求めた訴訟の控訴審判決で、東京高裁は1月31日、訴えを却下した東京地裁判決（2017,3,23）を取り消し、審理を東京地裁に差し戻した。
- 沖縄・高江、増え続ける米軍機騒音

集落を囲むように六つのヘリパッドが造られた沖縄県東村高江地区で、米軍機による60デシベル以上の騒音発生回数が、2017年度の12月末時点で8、144回と、前年同時期を428回上回っていることが沖縄防衛局の調べで分かった。最新の12月の騒音回数は1、760回で、オスプレイ配備後の12年度以降、同月で最も多くなっている。昨年10月に発生した大型ヘリの不時着炎上事故以降、住民の不安解消より軍の運用を優先する米軍の姿勢が浮き彫りになった。（沖縄タイムス 2.19：「平和を実現するキリスト者ネット」ニュースから）
- 日本カトリック司教協議会、「天皇の退位と即位に際しての政教分離に関する要望書」を安倍首相に提出（2月22日）。以下、同要望書本文。

「2019年4月30日に今上天皇が退位され、翌5月1日に新天皇が即位されます。前回の天皇逝去と即位に関しては、皇室の私的宗教行事である大嘗祭を『宗教色はあるが公的性格をもつ皇室行事である』として、それに国費を支出し、三権の長が出席しました。また国事行為である即位の礼にも宗教的伝統を導入しました。これらは日本国憲法の政教分離原則にそぐわないと考えます。そして昨日の報道によると、今回の大嘗祭においても前回は踏襲する方針が示されました。私たちはそれを大変遺憾に思います。日本国憲法の政教分離（憲法第20条）の原則は、日本がかつて天皇を中心とした国家神道のもとで戦争を行い、アジアの人々をはじめ世界の多くの人々の人権と平和を侵害した歴史への反省から生まれたものです。この不幸な歴史を決して忘れず、同じ轍を踏まないようにする責任を日本政府は負っています。そのために、私たちは次のとおり要望いたします。『**天皇の退位と即位に関する一連の行事にあたって、日本国憲法が定める政教分離原則を遵守し、国事行為と皇室の私的宗教行事である皇室祭祀の区別を明確にすること**』（注）日本カトリック司教協議会とは、日本にある16教区のすべての教区司教、協働司教、補佐司教から構成されている常設組織で、この要望書はその定例総会で採択されたものです。

（編集後記）マスコミには、現職自衛官の勇気ある訴えをもっと大きく取り上げてもらいたいものだ。／日本カトリック教会の「最高議決機関」がいち早く危険信号を発した。さて、我々日本キリスト教会は？（K生）

759号ヤスクニ通信 2018年4月8日
発行 日本キリスト教会
靖国神社問題特別委員会
発行人 古賀清敬 編集 糸広国
発行 糸広国（大和教会）
〒242-0021 神奈川県大和市中央
7-1-22 TEL&FAX 046-261-3957